

テント日誌 4月21日(木) 版より

気分の落ち込みがちな日々にて

4月21日(木) 三上治

近くの病院に薬をもらいに通っている。もうここ何年かお世話になっている。経産省前にテントができる前からだからもう何年も前からだ。高血圧用の薬をもらいに行ったのが最初だが、この間に心筋梗塞になり、最近では脳梗塞を患い、薬もその都度変わっている。人並みの病を経験してきたことになるのだろうか。その病院では医者というか、診てくれる人との話が楽しみだった。僕と同年代のおっさんでとりとめていう程の話をするわけではないのだが、どこか気分がホットするのだった。過日、若い医者が出てきた。息子さんか、お孫さんのようだったが、どこか落ち着かなかった。僕がいつも診てもらっている医者は元気とのことで、ひと安心だったのだけれど、なんとなく寂しかった。

その病院の待ち時間の時に、目の前のポスターが目についた。「気分は落ち込んでいませんか(?)」というのであった。そういえば、なんとなくしに憂鬱だと思った。あまり眠れないというか、心地よく眠りにつけない。歳を重ねれば憂鬱な気分になるのが普通だとは心得てはいるけれども、気分を晴らしてくれるものはなかなか見つけられない。テントひろばにやってくることはその一つだが、これとていろいろのことがあってなかなか来られない。そんな日々なのだが、今は、やはり、ロシアのウクライナ侵攻(侵略)のことが僕の心にのしかかっている。これが気分を落ち込ませる要因だと思う。いろいろな情報に水浸しのようにになりながら、考えても、考えてもなかなか納得するものが得られない。そんなことにめげないで考え続けていくことが、自分の宿命だとはわかってはいるのだが、それでも気分を落ち込ませる。

ウクライナへのロシアの侵攻(侵略)は僕には大変衝撃的だったが、何よりもまずそこで僕が感じ判断したことは、まず、これが理不尽なロシア国家の仕掛けた戦争だということだ。中国の馬鹿な外相が理解できると擁護していたが、理解できるような余地のない戦争だということだ。普通、戦争には大義というか、それが理不尽なものであれ仕掛ける側の理由(言い分)というものがあるが、それすら見当たらないものだった。後にプーチンはロシア系の住民を守るためとあいだしたが、これは俗にいう後づけである。信用のおけるものではない。こんなひどい戦争をなぜ平気でやるのかというのは大きな疑問だったが、これはプーチンの戦争観が古典的というか、古典的な国家主義によるものであることが、幾分かは明らかになった。彼らがよく言うネオナチではないが、プーチンは現代のファシストでる。そう言った情報もあるが、彼の政敵暗殺や毒殺、などを聞いているとそう考えていいと思う。彼は自分たちのことを民主独裁というが、ヒトラーだって議会的手続きを経て独裁的権力者になったのだ。僕はだから、この戦争が何らかの外部要因(国家的安全を脅かすもの)があってというよりはプーチンのロシア統治のためではないかと思った。プーチンの統治の危機という内的要因が戦争の主要因だろうと推察したが、これは間違いないと思う。2024年の終身大統領を目指すことがあるのだと思う。それに対する不安というか、危機感があり、彼の統治をめぐる危機感は想像以上のものがあるのだと思う。こういう判断は僕なりの経験を踏えた直観からきているが、こういう直観はあまり間違はないと思う。

この侵攻に対するウクライナの抵抗は予想を超えたものであり、大変なものである。ロシアを敗戦(敗戦と言ってもいろいろの段階がある)に導くものだと思う。ロシアの不当な戦争を敗戦に導く

ことは歴史的な希望である。ベラルーシの若者が義勇兵として志願していることは、それを示している。

ウクライナの人々の抵抗はこうした戦争(あえていえばプーチン型の侵略戦争)を廃絶していくための現実的な展開であり、これとロシア内部のプーチンの政治批判(戦争含めた批判)の結合(大きな意味での結合)が、プーチンの予想に反して進んでいるのだと思う。この進展は世界の人が固唾を飲んでみていることであり、他の独裁国家の官僚たちも自分たちの未来を重ねてみている事と思う。

今回の戦略戦争に対する抵抗の中から生まれつつあるのは戦争を廃絶していく現実的、実践的な動きである。ロシア型の侵略戦争を歴史的な戦争として終わらせる、段階的にせよ終わらせるものがこの動きになる。これはこの戦争をウクライナの勝利、あるいは勝利的停戦に導くことだが、重要なことだ。このことは明瞭なしておかなければいけない。

停戦がこの戦争を止めることはあり得る。さしあたっての解決はこの現実的な過程を媒介にしてしかありえないにしても。長期的な視野に立てば、この戦争の結果如何を超えてプーチンのロシア統治は終わりになるだろうと思う。この統治が人々に多くの惨禍をもたらさないで終わらせるのならそれは速ければ速い方がいいし、そのためにはロシアの敗戦、あるいは敗戦的な停戦がいいのである。一番、近道である。

この戦争に当たって、プーチンはこれを程、大規模なロシア制裁やウクライナ支援が起こることは予想してはいなかったであろうが、アメリカやNATOが参戦してこないことは読んでいたのだろう。核兵器使用の脅かしがきいているのだろうがそれは計算済みのことだったと思う。アメリカやNATOが参戦しないことはこの戦争を本気で止める気がないためという批判もあるが、世界戦争に拡大しないことは良いことだ。これは先の予測のできないことでもあるが現時点では良いことだと思う。参戦と支援とで線引きをすることは現実的判断として難しいことだが、差し当たっての判断としてはいいのではないか。武器援助ももちろんいい。その責任はロシアが負うべきことである。

この戦争についての議論は「百花争鳴」のような状態あるらしい。これはこの戦争を受けて、すぐに核武装の勧めから憲法改正の提起を言い出した体制というか、保守の面々だけではない。雑誌『文藝春秋』が核武装の勧めを特集していたが、僕はこうした動きを批判したい。ただ、これまでの反戦平和論では立ち向かうのが難しいことを自覚している。この議論は僕が属している「9条改憲阻止の会」なども含めてやっていきたい。

反体制側というか市民運動の側も議論は「百花」的らしい。これは当然ことであると思う。統一された戦争観が今はないからである。指南力のある戦争についての思想が不在なためである。

我が国には憲法、とりわけ憲法9条があるではないかというが、それを裏付ける思想はバラバラであり、統一的なものは存在しないのだし、それが今回の事態に直面して露呈しているである。

この戦争についての議論が多様な展開をしているには、二つのことがある。一つはこの戦争の評価というか、位置付けについてである。もう一つは提案(停戦)ということがある。いうまでもなくこの二つは相互に関連している。

この戦争には具体的な評価が不可欠である。ここではロシアの侵略ということではほぼ一致しているとみなしていいだろう。ただ、この評価には一般化された戦争観(歴史的な戦争観)が関与する。理念というか、戦争観が関与する。そうすると途端にいろいろの見解が出てくる。

誰もが、これをロシアの侵略戦争というが、それはそうだが、戦争の原因はといい出す。これは自分の戦争観からは今回のロシアの侵略を評価すると腰が落ち着かないことになるのだと思う。NATOの東方拡大が今回の戦争の要因だとか、アメリカがそそのかした戦争というのはその例である。これは最も多く伝えられるものである。

プーチンやロシア被害者の立場にあるというのが、ロシアの国内で流されているものらしいが、それに無意識に近づいてしまっている見解であるといえようか。ロシアの侵略という加害者の行為とロシア被害者論は結びつきようのないことだが、ロシア被害者論は形を変えて浸透しているといえようか。それは何故か。

考えられることの一つは階級的な戦争論(観)の残滓というか、影響が残っていることである。レーニンの帝国主義戦争論でないが、戦争は資本主義権力(経済権力)の対立としてあり、戦争は帝国主義戦争であるという考えが長く流布されてきた。

これは左翼や反体制派を支配してきた考えである。これは第一次世界大戦の総括としてはある程度の妥当性が考えられたが、第二次世界大戦以降の戦争についてこれは疑問のあることだった。ファシズムの戦争を資本制権力の戦争ということは疑問のあることだった。ファシズムについてはアレンとの分析があるが、ファシズム戦争をドイツの資本制権力の戦争としては分析していない。帝国主義戦争というなら帝国主義化した政治権力間(国家権力間)の対立のこととしてならこれは検討すべきことだとおもうが、経済権力を根底にした帝国主義戦争論は妥当性を持ってはいないとおもう。

この帝国主義戦争観は部分的な妥当性しかないのだと思う。僕は日中戦争の分析をやっていてそこでの帝国主義とか、帝国という概念が経済に還元できるものではないことに気が付いた。日本の中国大陸の侵略戦争は日本帝国主義の市場獲得を根底にしていたと言われていたが、これが中心的動機であったとはいえない。帝国主義化した政治権力の野望がその中心にあったのだと認識しえる。

戦後の米ソの冷戦構造中で、ソ連はレーニンの帝国主義戦争論を継承して自分たちを平和勢力として、戦争は帝国主義陣営の属することとしてきた。これは社会主義圏の内部の戦争(1956年から始まったソ連と諸国戦争)を説明しえない戦争論だった。この紛争を戦争勢力が社会主義圏への進出(戦争を仕掛けてきた)としてきたものとして説明してきたのである。

いうまでもなく、社会主義圏の内部の戦争はソ連の他の諸国に対する帝国主義的政治的・軍事的支配に対する反抗としてあった。これらを隠して、レーニンの帝国主義戦争観は戦後にソ連圏から流布され続けてきた。この戦争観は戦後にソ連的なものから出発した左翼や反体制派の中に影響力を持った。ソ連圏の側の戦争は正義の戦争、平和のための戦争であり、核兵器もきれいな兵器と言われ、対極で帝国主義戦争論があったのだ。戦争についてのこの図式は戦後の左翼や反体制派の人々に強い影響力を持ってきた。

この残滓というか、遺伝子的な影響がまだ残っている。戦争を分析し、評価するとき、この戦争観はで地金として出てくるのだ。

もう一つは西欧と東方の対立という図式である。これについてはプーチンが密かに持ち込もうとしていることでもであると推察されるが、中国のことを考えると検討しておかなければいけないことのように思う。西欧の東方(東洋)への進出ということで戦争を理解し、認識するものはおなじみのものと言える。戦争とは西欧列強の戦争であり、それは東洋の植民地化を伴ったものであった。

戦争の歴史は西欧の拡大であり、東方(東洋の抵抗)は歴史的事実であった。だから、東洋の抵抗としての戦争という図式は日本ではアジア主義として出てきた。そしてこれは東洋の側に属する国家が自己の戦争を根拠づける有力なイデオロギーになった。

これをプーチンは密かに導入しているが、中国の動向を考えると、ここはよく見ておいて方がいいと思う。西欧と東洋との対立という図式は僕らにはアジア主義も含めてなじみ深いものだが、この観点から戦争を見る考えは有効ではない。これについての展開はここでは端折るが、僕がここで提示したものは階級観に基づく戦争観、日本的(アジア的)なものに基づく戦争観の問題である。この二つの戦争観は無効だが、それを超えていく戦争観が未だ構築されないために、こういう戦争観が残滓のように出てきくるのだと思う。百出する議論の背景には現在の戦争観の問題が横たわっている。

ここまではこのロシアのウクライナ侵攻の評価が百花争鳴的かという事の説明なのだが、それならば、いくつかの提案ということはどうなのだろう。僕の家には送られてくる通販誌がある。その表紙にこうある。「一日も早くウクライナに平和が戻りますように。」(『通販生活』)。

おそらく、だれもこのことを否定しないし願っていることだろう。だが、それをどう実現するかという難しいことだということもまた誰もが知っている。ウクライナの平和が戻ることを誰も否定しないが、それが、戦争という現実の動きとどう関係するのか、そこが難しい。

僕らはロシアのウクライナ侵攻に関わりたくても関われない、傍観者的な場所に置かれる。これはウクライナでの戦争で僕らが傍観者的位置に置かれていることは構造的な問題であり、この問題は僕らにはまず自覚の問題としてやってくるのだが、僕らに関われるとしたら国家を媒介にしてということがまずある。これは現在の世界が国家を最高の共同体とする関係にあり、国家間の事柄として戦争がある限り、僕らは国家を介在して関係するということがある。このことは今度の戦争について国家がどういう態度にできるか、対応するのかという形で出てくる。僕らに国家に対する要求ということになる。国家の戦争に対する態度(憲法の規定など)がもんだになるのはそのためである。

僕らの関りとしては、今回の戦争に国家がどういう態度をとるか、それが第一のこととして出てくる。その点で言えば、日本国家がロシアの侵略戦争に批判的立場に立ち、ウクライナ側を支援しているのはいいことである。当然のことだ。それは僕らの国民(市民・地域住民)の要求に離反していないものだからである、僕らはアフガニスタンやイラク戦争ではアメリカの支援に立つことに反対したが、今回は日本国家のウクライナ支援に賛成である。それは僕らの意思と国家意思が離反していないためである。

国家という媒介を超えて僕らはこのウクライナ戦争に関わりたい考えがある。それは細い道であろうと当然である。先にも取り上げたがベラルーシの若者 300 人が義勇軍への志願兵のことがある。彼らはベラルーシの国家のウクライナ侵攻の評価(ベラルーシの評価はロシア側より)に反対だし、それに闘うために隣接治ということもあるが、志願兵になる。僕は国家が制約の多い存在だし、僕らの意思を実現したいと願う。かつてなら僕らはナショナリズムを超えてとか、国際主義の立場に立ってと言ってきた。さしあたっての国家方針には反対ではないが、長期的な視野を含めれば考えが違うということがある。日本国家が憲法の制約の下で支援にとどまっているのはいいとし、戦争観には僕らと違いがあるのだから、別に関りの欲求が出てくるのは当然である。

インタナショナルと国際主義の立場は現実性を失っている。だから、「平和を願ってとか」「戦争反対」という立場がそれにとって代わっている。左翼的面々、反体制的な面々がそういう立場から、今回の戦争に対して提言、それは停戦の提言をしているのはどうぜんである。停戦の提言と言ってもいろいろとある。その多くは「一日もウクライナに平和が来ますように」ということ、あるいはこれにそった提案ということになっているのだが、それについての感想を述べておきたい。

例えば「プーチンの戦争も否だが、ゼレンスキーの戦争も否というのがある。そして停戦を提言する」というのがある。これは戦争反対という立場からの提案であり、よく見られるパターンである。戦争反対、この上で停戦の提案がでてくるのだが、これは通りの悪い論理のように見える。戦争反対、停戦という誰も反対しない理念の提示であるが、僕はこのことに疑問を感じる。

だがここには重要な認識が故意に、無意識に抜かされている。プーチンの戦争は彼が意思した戦争であり、ゼレンスキーの方は望まなかった戦争であるという点である。一見すれば国家間戦争にみえてもそこには両者の間には重大な差異がある。この重大な差異を無視すればこの戦争は一般化された国家間戦争になる。

多分、プーチンの戦争もダメだが、ゼレンスキーの戦争もダメというとき、戦争の原因がゼレンスキーにあるということを密かに援用しているのだろうと推察されるが、この重大な差異を無視している。これは現実には戦争が存在し、その戦争がどのように解決されようかとしているかの動きを無視している。現実の戦争の動きに対して、傍観的者的立場に立つ関わりであり、現実性から疎外された理念という立場に立ってしまっている。これは彼の論理が一般的な戦争反対論なり、空論になってしまっている理由だ。それだけでなく提言はプーチンの戦争の擁護にすらなってしまう。

これを見ていて僕は僕らのたってきた戦争反対(非戦)という理念が、空想的なってしまうことを懸念していたこと実現してしまっているように見えた。これは戦争の否定という理念と現実の戦争の関係というか、現実の戦争に認識の問題なのだ。

ゼレンスキーはロシアの侵略という暴挙に対してやむなく、抵抗(戦争)に入った。そこに行きつく理由をあれこれ言う人もいるが、今は、これは無視してよいと思う、そうすべきだ。問題を曖昧にしないために。現実にはプーチンが侵略という行為をやったことが出発であり、これに対する抵抗が出発であるからだ。この抵抗は侵略戦争に対する抵抗である。

そしてこれは侵略戦争による抵抗であって、戦争(プーチン主導型の戦争)否定を通して戦争の段階的な否定をやっていることである。戦争一般の否定ではないにしても段階的に戦争の否定をやっているのである。戦争の歴史を見れば、歴史は戦争一般の否定に向かって進んできたのではない。特定の戦争を否定することを通して戦争を否定に近づいてきたのである。それは戦争を廃止し、否定することからみれば、戦争を残した矛盾のはらんだものである。

しかし、現実的には特定の戦争を否定することは戦争を残したままの戦争の解決だが、そういう矛盾の提起の中で戦争の否定に近づいてきたのだ。ファシズムに対する連合国の戦争はそういうものとして位置づけられるものである。あらゆる戦争を否定することは理想であるだけでなく、戦争について僕らが持つべき思想である。特定の戦争を否定しても戦争そのものは否定しないといことで僕はファシズム戦争否定した米ソの戦後の戦争観を批判してきた。しかし、僕は米ソがファシズムの戦争を否定してきたことは評価してきたのだ。段階的であれ一つの戦争を否定することをやってきた。

戦争を矛盾に例えれば、戦争の否定が戦争の解決である。特定の戦争の否定はその意味では矛盾の解決ではない。それは矛盾を持ったままの矛盾の提起だ。特定の戦争の解決をしたけれども、戦争そのものを否定したのではないというのは矛盾に対するもう一つの矛盾の提起だ。しかし矛盾の解決に向かう運動は矛盾に対して一挙的な解決ではないが新しい矛盾を提起して解決していく道がある。段階という概念が出てくる理由である。

現実の存在としての戦争が否定される歩みは特定に戦争の否定の積み重ね(新しい矛盾提起)ですすんできたということがある。戦争反対という理想論が空想にならないためには現実の戦争を媒介していくことが大事であり、今回の場合には僕が指摘した重大な差異をきちんと理解し取り込んでいくことが大事である。

ゼレンスキーのロシアの侵略戦争に対する抵抗と戦争は歴史的にはロシア型の古典的な戦争の否定である。そしてこれはプーチン型の戦争を肯定している、あるいは国家方針としているものへの否定である。こういう現実に対して関わり得ない戦争一般反対論は空論になってしまう。

いうまでもなく、ゼレンスキーの抵抗、戦争の仕方には矛盾がないわけではないと思う。戦争の否定ということが彼にあるのかという疑問もあろう。ただ、ゼレンスキーの戦争は現実の構造が強いところが多分にあり、それは現段階で否定すべきことではないし、今後の問題である。

今後に問われるべき課題であり、それはみておくべきことだ。だが、今は、なにより、ゼレンスキー含むウクライナの人々の抵抗を評価し、支持すること肝要なのだ。それは戦争を廃止し、平和を望むということと矛盾しないし、その現実的展開だからである。そこを無視した停戦の提言は空想的で無意味だ。

様々の見解の中で小さいけれど非暴力抵抗の提起がある。抵抗には様々の形があるし、非暴力抵抗もその一つだ。軍事的抵抗もその一つである。様々の形態を含む抵抗の全体を擁護する中で、非暴力の抵抗をいうのもいい。しかしそれは抵抗の核をなす軍事的抵抗を否定する形での提言であってはならない。それしいられた戦争に対する人間の抵抗を否定することだが、否定する権利は誰にもない。